

蔵王山安善寺

◆編集・発行人◆
近藤龍弘

〒940-0052
長岡市神田町1丁目4番10
TEL.0258-32-2811

◆スタッフ◆

小林国二・高橋潔・室賀清輝
高橋利春・屋代 健・飯泉隆史
近藤マリ子・近藤真弘・近藤善信
後援・株式会社アサヒ
印刷・(株)北越時報社



ご家族の皆さままでご覧ください

暑中御見舞申し上げます

翠巖 弘

今年六月五日に「季刊蔵王山安善寺」の生みの親でもある、初代編集委員長の、故・安藤一夫様の十七回忌を迎えました。編集委員の皆様、読者の皆様方の御協力、特に安藤一夫様亡き後、株式会社アサヒ社長・伊藤英興様のご厚意により、二十年の長きにわたり、第八十二号を発刊することができました。

平成十年三月七日の創刊号発刊に到るまでのこと、その後の編集会議、懇親の席でのにやかな安藤編集長の顔が懐かしく思い浮かべられます。

平成十四年二月、病の中、安藤ご夫妻と私を含め七人で、大本山總持寺に参拝、板橋興宗禅師様に拝問、一時間余りお話を拝聴、その後修行僧に諸堂を案内し

ていただき、拝観後は、二ノ膳付きの精進料理を戴き、本山を後にしました。それらの思い出を三月八日発刊の第十七号に、又同じ号に「世話人座談会」として「禅宗の根本は自分を見つめること。宗教とは何か、お寺の意義は何か、季刊紙を通して考えてみたい」のタイトルで皆様の意見を取り上げられ、掲載されました。一号より度々わかりやすい言葉で、尚かつ奥の深い、考えさせられる文章を掲載していただきましたが、第十七号が最後の掲載となりました。

きることを願われたように思います。

上の写真は大本山永平寺様の全景写真です。六月七日〜九日の二泊三日の安善寺団参、三十五名参加での、大本山永平寺、大本山總持寺祖院、羽咋の永光寺様などの参拝の旅でした。

道元禅師様の和歌に「峰の色 谷の響きも 皆ながら 吾が釈迦牟尼の 声と姿と」があります。ご本山に一步踏み入っただけで、無言の教え、説法を戴いたようでした。また、同じく「閑らに 過ぎ月日は 多けれど 道をもとむる 時ぞすくなき」の和歌があります。

改めて今後の生活も一日くを尊く、心して生きていきたいものです。

【日々精進(四十一)】

心にも潤いが生まれる、恵の「梅雨」

近藤真弘

梅雨の季節に入り、じめじめとした日が続いています。日本ではこの雨の多く降る時期を「梅雨(つゆ又はばいう)」と言いますが何故この呼び方になったのでしょうか？調べてみると広辞苑には(梅の

この「梅」という字は曹洞宗でもよく使われます。道元禪師は正法眼蔵で「梅華の巻」を書かれています。道元禪師もその師である

如常禪師も「梅の花」とても愛していたようです。雪国の我々は特に感じますが、長い冬が終り春が訪れる情景には梅の花が思い浮かびます。雪深い越前の山中で道元禪師も冬の間、梅の花が咲くの

からとも、物に黴が生じやすいからともいうとあります。昔中国ではこの時期を「黴雨」と書いて(ばいう)と呼んでいたが言葉が悪いので同じ(ばい)と読む「梅」の字を充てたという話も調べていたら出てきました。

「つゆ」と読むのは湿気で露が滴ることからというような事も語源にあるようです。

いずれにせよ梅雨はただでさえじめじめした良



を待ち遠しく過ごされていたことでしょう。ただ、道元禪師、如常禪師は梅に對してただ綺麗な花、情景的に良い、とだけとらえていたのではなくもっと深い仏教的なお考えをお持ちになっていたようです。そういったことから曹洞宗でお唱えする御詠歌のことを梅花(ばいか)と呼び、その集まりを梅花講と呼びます。梅の花をモチーフにした「ばいかさん・ばいかくん」というマスコットキャラもいます。

梅の花の散りばめられた紙に一仏ずつ丁寧に書き記していきます。受け継ぎ伝える大切な場面にも梅は記されているのです。

まさに自然がいのちを受け継ぎ伝えるためには欠かせないのが梅雨です。必ず過ぎさなければいけない梅雨の時期、嫌な時期だなあと思つて過ごすのではなく、無くてはならない恵みの時期だなあと思つて過ごせれば心にも潤いが生まれるのではないのでしょうか。



父と暮らした六年

新田真知子

母が亡くなってからずっと一人暮らしをしていた父と、三十数年振りに長岡と一緒に暮らすことになりました。

仕事もすでに退職して家に居た父は、老人会の会長をさせていただいたり、好きな小鳥を飼ったり、池の鯉の世話、めだかも育てていました。

そんな中で一番興味を持った物がありました。私が帰ってから設置したパソコンでした。操作を覚えると日長インターネットをしていました。聞こえてくるのはユーチューブから流れてくる演歌と軍歌でした。世界が広がったようでした。特に軍歌はお気に入り、家中大きな音が響き渡っていました。

父には思い入れがありました。奈良の天理市で

海軍の訓練をした青春時代があったからです。戦地に行くことはなかったのですが、その時の戦友のことをいつも話し、葉書のやりとり、また、年一回の戦友会にも出席していました。「もう一度、天理に行きたいなあ」と口癖のように言っていました。が、叶えてあげることができませんでした。

一緒に暮らして、私が

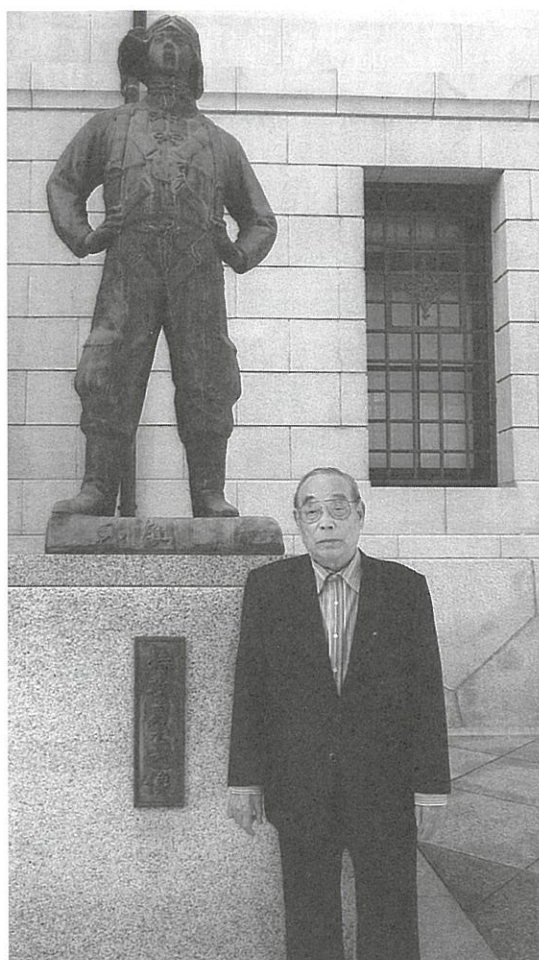
一番頭を悩ませたのは、食事でした。長く糖尿病を患っていたので、インシュリンを打ち、週三回の透析にも通っていました。制限のある中でメニューを考えるのは大変でした。何しろ、好き嫌いの多い父でしたので、病気のことを考えて作っても口に合わず、口喧嘩の日々でした。

「ここまで生きたら、も

う食べたい物を食べる」という父に、私も「もういいか」と心を決め、それから、好きな物を食べるようになりました。

しかし、長年の病魔はそう甘くありませんでした。敗血症により高熱が出てしまい、左足を膝下から切断しなければならませんでした。命を守るための決断でした。それから施設にお世話になり、昨年の十月初め、九十一歳の生涯を閉じました。

今年も、もうすぐ長岡の大花火が開催されます。



生前、花火が近づくこと決まって話していたことがありました。

昭和四十五年、長岡観光協会が市民の心意気と明るく住みやすい躍進する長岡を折り込み、気軽に口ずさめる内容の「音頭」を募集し、沢山の作品の中から歌詞が決定。詩人の深尾須磨子さんが補作し、現在の「長岡大花火音頭」が誕生したそうです。

その時、市役所の経済部、商工観光課に在籍して

ていた父は、この企画を担当し、東京に何度も足を運び、深尾さんと打合せを重ね、北島三郎さんに歌っていただくことになったそうです。この歌の誕生に関わったのは、父の自慢でした。

今年は、空から花火を観覧し「ドンドンドン ドンドン おみやしやんがつけた火が走る……」と、口ずさみながら、あの世でもみんなに自慢していることでしょう。

大本山永平寺参拝と能登の旅

関 勝枝



り、東京に住んでいるため、姉と共に現地参加させていただきました。そして、昨年父が亡くなり、一周忌の今年「大本山永平寺参拝と能登の旅」の企画を姉から聞き、今度の旅行で、二本山に参拝出来るとわかり、参加させていただきました。

一日目は安善寺を出発し、実家のある柏崎経由で、新潟・富山・石川・福井の四県を縦断するバス旅行です。

まず、曹洞宗二大本山の一つ永平寺に向かいました。途中、副住職様のお薦め民家を改装した「けんどう蕎麦」で昼食を頂きました。手打ちそ

ばを大根おろしのつゆと辛味大根のしぼり汁で、かつお節と刻みネギのみで食べるだけなのですが、全国各地から訪れる程人氣のお蕎麦屋さんで、とても美味しかったです。

お腹を満たした後は、目的地大本山永平寺と高野山真言宗別格本山那谷



寺の参拝です。那谷寺はお寺というよりは、観光名所かと思ふほど巨大な岩と庭園が印象的でした。昨年度は開創一三〇〇年祭

で、本尊の千手観世音菩薩像が公開されたそうで、残念でした。

一日目の泊りは山代温泉「ゆのくに天祥」です。自家源泉天然温泉で三つの大浴場があり、長時間のバス旅行の疲れを癒すには最適でした。

今回の旅行に参加させていただくのにあたり不思議な「縁」を感じました。4年前に母が亡くなり、

ちょうど一周忌の年に「大本山總持寺二祖峨山禪師六五〇回大遠忌法要と鎌倉・箱根の旅」の企画を知

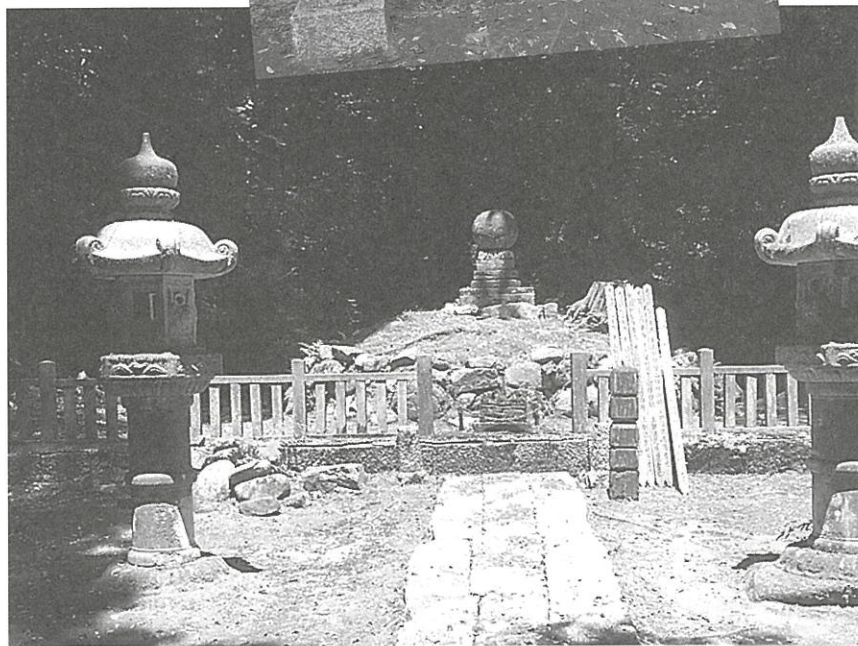
二日目は日本唯一、車で浜辺を走れる千里浜なぎさドライブウェイをバスで走行し、石川県にある洞谷山永光寺に参拝し

ました。永光寺には清らかな水が湧き出ている「白山水」があり、現在も鶴見の本山總持寺に献水されていると聞き、ビックリ

しました。五老峯の左手には、峨山様が永光寺から總持寺までの山道十三里を踏破された山道の入口があり



ました。その後、大本山總持寺祖院を参拝し、NHK朝ドラ「まれ」の舞台になった白山千枚田を、塩かけソフトクリームを舐めつつ観光し、輪島温泉高洲園へ向かいました。大宴会の後に、「御陣乗太鼓」を堪能しました。凄い迫



力でした。

三日目は輪島の朝市を見学し、高岡の瑞龍寺を参拝しました。住職の話のうまさに感動しました。帆船海王丸を観覧した後、帰路につき、無事に三日間のバス旅行が終わりました。

最後まで両親の面倒と供養をしてくれた姉と伴に旅行が出来たことに感謝し、楽しい旅を提供してくださった皆様にお礼を申し上げます。

合掌

【第26回KAKA笑の会】 精進料理を楽しむ会

加瀬由紀子



今年も、安善寺本堂を会場に「第26回・KAKA笑の会」を、5月11日夕、開催いたしました。
毎回楽しみにおいでくださるお客様も多く、なかでも好評なのが「精進料理を楽しむ会」です。

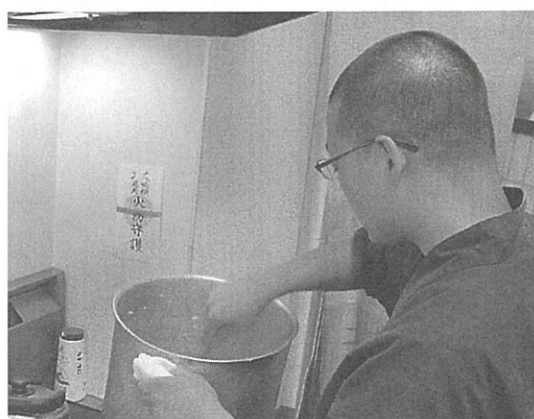
本年は、長岡には初めて、とおっしゃる典座の折橋大貴（おりはしだいき）さんをお迎えして、フレンチ精進といった趣向を味わう会となりました。

折橋さんは、1989年生まれで、大本山総持寺で修行、典座（てんぞ）禅宗の寺院等で、料理を司る要職のひとつとなり、崎村調理師専門学校を卒業。
現在は神奈川県常泉寺副住職と、箱根フレンチレストラン「草庵」シェフを兼務しながら、全国曹洞宗青年会の精進料理講師等、ご多忙な日々を過ごされていますが、安善寺副住職

様の知人ということ、で、長岡初の「フレンチ精進」をご披露いただく機会に恵まれました。

折橋シェフは、並々ならぬ意気込みで2日前から準備のために来岡。実行委員10名も材料の調達に協力し、いよいよ当日早朝より、シェフの指示に従い、調理に取りかかりました。

刻む、茹でる、皮をむく、すり鉢で擦る、油で揚げる、盛り付ける、お膳を運ぶ等、日頃の主婦業？ の手際良さを発揮、実行委員大活躍で何とか開宴に間に合わせました。



では、当日のメニューを公開しましょう！
①山芋とアスパラの和風ポタージュ
②山独活、人参、新じゃがのきんぴら
③手作りガンモ

の揚出し

④菜の花と根菜のリゾーニ

⑤塩漬けトマトのサラダ・ソースピストー

⑥新ごぼうの炊込みご飯

⑦漬物

⑧苺のノンアルコールカクテル

⑨抹茶のパバロア

シェフは、周到に人数分のレシピも用意されましたので、その中から数点をご紹介します。

まず①のポタージュで



すが、山芋は千葉産の粘度の高い大和芋を使用。炒めた玉葱と、茹でたアスパラを裏ごしし、精進出汁（昆布、干し椎茸等）と薄口醤油、オリーブオイル、塩、胡椒で調味。

③のガンモは、木綿豆腐、山芋をつぶし、干し椎茸、人参、大葉、白ごま少々をとともに混ぜ、小さい球形に握って揚げます。かけ汁として精進出汁、大根おろし、なめこ、ミョウガ、薄口醤油、みりん、



砂糖、日本酒で作ります。
④のリゾーニは、長岡では入手できないので、ご持参いただきました。(写真)玉葱、菜の花、人参、筍水煮、ホールコーン缶、精進出汁で調理。



⑤のサラダに添えたドレッシングもシェフが作って箱根からご持参。数種のハーブが醸し出す絶妙な味わいが大好評でした。

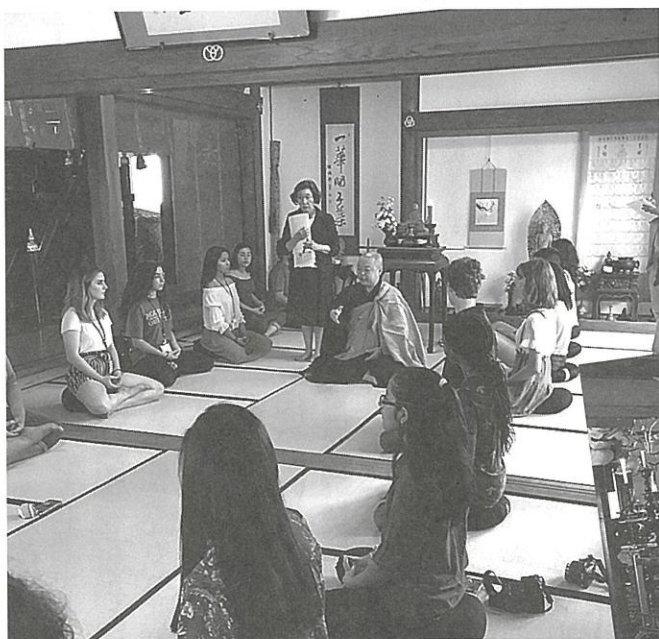
⑨の抹茶ババロアは、抹茶、豆乳、植物クリーム、ゼラチン、三温糖を混ぜ合わせ固めて、アクセントに振りかけたきな粉もおしゃれなデザートとなりました。

何といっても、折橋シェフのレシピを貫いているのが、「精進出汁」です。このコク深い味わいこそは、典座としてのキャリアの為せる技術で、参加の皆様からも「素晴らしいお味を堪能させていただきました」と感想を多数頂戴しました。

副住職 通信

フォートワース 坐禅体験

今年も六月二十二日に長岡市と姉妹都市のアメリカテキサス州フォートワースから交換留学で長岡にやってきた中・高校



生が坐禅体験のため安善寺を訪れました。
通訳を介し熱心に坐禅指導を受けたフォートワースの子供たちは、一五分ほどの坐禅体験の後、客殿で日本茶を飲み、住職の話しを聞いた後、本堂の鐘や太鼓などといった鳴らしものを実際に鳴らし、記念撮影などで約一時間半のお寺体験を楽しみました。

旅立ち

(平成三十年三月)

六月末日まで

須佐 サト様 三月六日寂

長岡市緑町

菊谷ヨシエ様 三月八日寂

長岡市希望ヶ丘

渡邊 正様 三月十六日寂

神奈川県相模原市

西田 善作様 三月十七日寂

東京都荒川区

河野スミ子様 四月十四日寂

長岡市中島

加藤千恵子様 四月廿一日寂

新潟市中央区

小林タケ子様 四月廿五日寂

長岡市四郎丸

白井 和子様 五月十七日寂

長岡市深沢

品田友太郎様 五月廿九日寂

新潟市中央区

山崎ハツエ様 六月十一日寂

新潟市東区

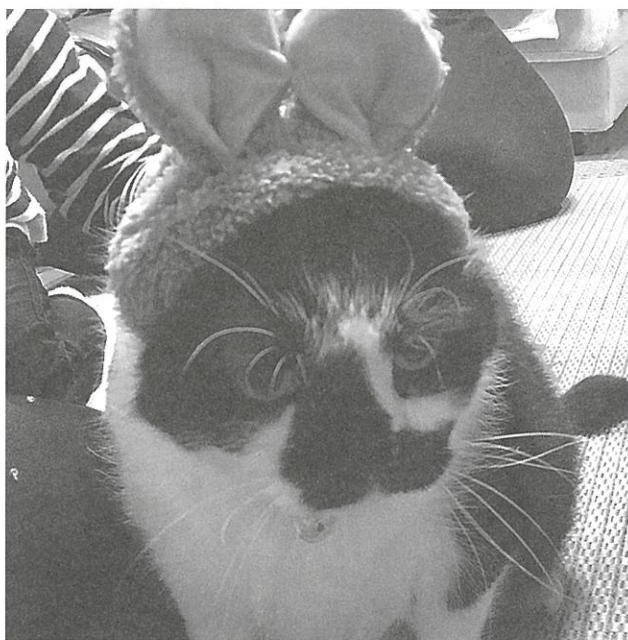
ご冥福をお祈りします。

ボブの独り言

近所付き合いは大切!

ボブの独り言

いつまでも、寒い日が続き、なかなかストーブを片付けられない日々が続きました。庭の花々はちゃんと季節を知っているのですね、お寺の庭でもツバキが多く、「藪の中にこんな珍しいツバキが咲いていたのに!」今まで気付かなかった! 見てみて!と、バーバが枝を切ってもつてきて花瓶に入っていました。



今は、どこでも見られる色とりどりの紫陽花。お寺の境内にも、変わった紫陽花が次々と咲いています。最近雨が全く降らないので可愛そうなくらいです。

そんな花を見たいのと、久々にみんなの顔も見たいので、ももの声がしない日に、下におりていきま

した。ちょうど写経会が終わって、皆さんが帰られるところで、「ボブちゃん、久しぶりねー、太ったねー!」私を覚えて下さっていたのです。

今年の春から登校の班長になった真人君、昨年

うですが、真人君はとても優しいんです。学校から帰って来ても、ランドセルを置くか置かないうちに、「真人ー遊びー」って、一年生が玄関の前で待っているのです。「子供は遊びに来るのを知っている」、親の顔を知らない」と、ばーばが「みんなでお食事会しない?」の一言で、おじいちゃん、おばあちゃん、それに秋から越して来る家族も含めて、大はしゃぎの食事会になりました。

今の世の中、せめてご近所だけは、普通に話せない、子供も守れないですよ。

時代が変わったと言えば一番大きなことは来年度の安善寺住職が若様に変わる事でしょう。その儀式を行うために総代さんや世話人さん達が準備に入らねばなりません。

お便り原稿用紙

季刊誌では、壇信徒・読者の皆さまと、ごいっしょに誌面をつくりながら、コミュニケーションを深めたいと思います。

- ハガキまたはお手紙、ファックスなどで、お気軽にお便りを寄せてください。お待ちしております。
- 原稿の例
- 思い出話／ご家族、ご先祖、お寺の思い出話など。
 - 私に言わせて／家事や子育てのお話、身近な出来事など。
 - 教えてください／仏事のしきたりや疑問（編集部や住職がお答えします）など。
 - 嬉しい・楽しい／嬉しかったこと、楽しかったこと、悲しかったこと、怒ったこと。

費用も掛かる事なので知恵を絞って大事業を行わねばなりません。檀家の方々にご迷惑をお掛けしますが、一生にあるかなにかの晋山式に是非とも参加して欲しいです。